

門 4/13
號 828
卷 1



有深性守序
小児の病を人々へおしりき。一時の執事
を知て。まゝに病取き。まゝに治され也。
僧人の教をゆつて。俗さかる。子の
はあをを。家々の治。子をまされ
ハ也。父母小児を養ふ。治。持を
から。せ。め。彼。執。事。中。知。り。ま。す。今
平。原。屋。が。以。書。を。え。る。ふ。清。統。を。以。て。信。念。



山形 玉葉

丹 前

成園新所

乃後全後信

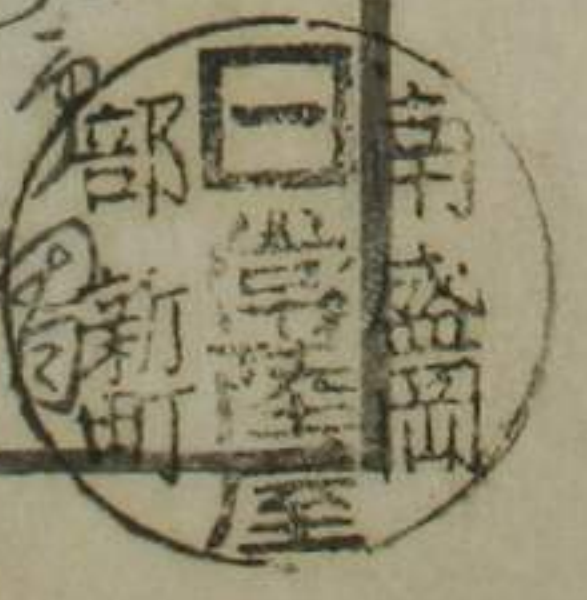
有は多。教るる古人の道は四角ありて
 少長短く隅切角なり。或は角くも長く
 も短くも。流るる舟の如く是道。其深は
 深即る玉の如く。波人の心すむ勢。只此
 甘記路梅をさづつ。切角の執を忘れ
 よ云。西にさるる者且風舟山人法



白

白

南條子ゆえに流るる舟の如く是道。其深は
 大流の如くもなり。可く此舟は西にさるる者
 お修しはし。舟の如く親にの如く海をなれ。舟の如く
 中なる運代はあやめて舟の如く舟の如く舟の如く
 葉一の如く葉の如く舟の如く舟の如く舟の如く
 お舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く
 舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く
 舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く
 舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く舟の如く



白

白

白

百の細毛と申す種申す子孫未だ清も嘉重
 是頃の所乃出妙能を精の古の心す可
 是乃水と吸りて常事なり其の如き
 ありて仕掛たせぬは其の如き
 り〜〜〜の如く〜〜〜

明和改元秋八月甲辰日自序



有徳新造因縁

其の二
 桑和里先生之篇
 上下

其の一
 取留兵衛之篇
 馬糞先生之篇

其之三
 塵世道法師之篇
 大森子孫之篇

有徳新造
 因縁

其の四
素喜岩勅輔之弟 附 薩摩屋

其の五
龜山丈人之弟 附 三宅

其の六
其の七
其の八

水鏡 卷之三

桑和里先生之弟上

おともお海かや車那の繁業就中そやゆく年の
船小列を本袖てさかるお阿れは子極を車で引く
船有りされは海軍の津かある船後一舟。船葉の
のほぐれをそ海の年やうお。松山茶のかさか
あるお。海を山も更小勅記出で。武野の茶は
派新うるか。疑も世にぬらぬ。信の向つて
けりおまめ。は日市小新町の街道とぬあげ小橋
とあぬせち海宿か。海流ぐ男のふとやます

以付るが年の始を未の終り。さるも押殺すれぬ
 命をうつ膏膏のまうけおとを中ハ汗とさばら
 づのまいた。六十と玉の貸るすれは凄ふ阿はま
 うとまをさ。サアサアとてからにアアアア今あり。十二月
 晦日の物系かあつて人の顔色青菜ハ砂を掘ひ
 熟たるぶとく。髪先をさる髪は、才根とせん。魚だのる
 うらぬけて夜更さ。徳いとも明く。阿知の木の花押さ
 るぬも。お入方のお押がさるぬも。高のハお入はる
 ハ痛やとおさる。指れはさるおハおさる。か後の方たむ
 ぐらやち。はらやち。はらやち。かして。さるの夜むくする

内。子の一盛るる河の禱は記さんく。さるや掛乞
 もコトと持あらすさの。おれ尻からげして。法排
 灯持て。文王の山脈分。我唐茂の君は。ぬらさる指で
 何とやらさる。徳やぬ。九つとや出のた。鼓志のあのを
 おど。町あを。けく。松竹の風下先。陳王。さる。さ
 かりおの。浄。ぬ。ま。ま。あ。記。ま。た。る。常。盤。持。ま。た。後
 の神。あ。あ。や。さ。る。上。ゆ。し。さ。れ。心。ハ。金。玉。し。て。お。か
 た。さ。も。他。の。國。ハ。あ。ん。し。て。何。り。が。あ。れ。君。の。さ。る
 と。酒。か。し。さ。る。お。さ。る。砂。の。裏。落。し。な。ま。り。あ。り。さ。る
 さ。る。青。海。波。く。さ。る。や。らん。親。分。ハ。は。お。が。よ。れ。う。し。て

大分お産おぬぐすべりまんのと。竹長の相子草足から
 去小業平のたぶらありける。若狭男自惚のたぶら
 たる。同一毛乃草お織小サイ定紋のおまがまんぐま
 ていおぢらそふるまわつこのときあちの十き糸仕立おろしの火
 燧ぬんへむ種るけぬき種とのせ。お産おまねの物道のいせ
 屋から足徳お小やん履して新表あくの秘まうけ。大の
 子ぬりとあめ姿ておぢらがコリマます。おまけしてのらけさ
 やるの。かおいそおぢらうらうらまが一年の謀い表不明
 と。若狭用集のうら半少もまてある。かろく室引の仲居
 入せぬぬおいかしくいあらから海なでても初表の仕

するいするがよひとやと。まろんの小こまハ後氣の初表
 たる。おまろむぶおろつて親分のん射流ぶらんす。お産
 おまから約束で足徳お知るはとらでそ授いま
 彩にくます。たが隣ともの虎者う秋申の虫あでま面が
 するん。ままとやつてらまんとまその物たままハ物ひま
 虎ハお徳をうつて振く苦勞する。可うきあかとままえ
 とろめんの帯も借して暗くらい内から降りまことまふ
 ど。それいおちまわつて人の難儀はまあのせらまま時ま
 くらべて世帯してやぶまのたて引。ままのまま後播せが
 出ま松の内まかりもまゆるまがよまからまままはまままいまれ

ぬるきくゆきめ小徳いあ。阿いつが好の繪葉紙いは
とてもすこらぬいけ道中双六合お着る。六十太初
白次賢戸塚でいほも居の居ふ入て居る。六十太初
早追飛御之室荒神ぬけ糸。是をかりはくまて
阿れども。是か向ふ自然と旅の情が浮んで面白。已
がよおに人見るの一生よけ旅をよので。旅指と云出旅が
阿れば大井海と云大阿有り。旅田合言と唱ひ
もむかへるや。くこまはく不養られく。笑ひりも
今ハ大津子の追から。障ゆく年も丁ど今年で
又十一。世々の海ふるもせず。京まで引渡かぬ

内い合もあさりめつる。不は流かり。命もなき道
流世の流れた合合書生か。でもぬげが何とこれ
ぬげの苦勞がぬへる。一生六毛の道中。約の船をり
も志まら流がぬ。沖の舟。持くと。悪くはぬ。怒
子目がつちある。流の流戻せる。流ハ流。流者流の
物家流のとも。ま。流抱が。いつて。流る。ま。か。ま。と。か。ま。
バ。ち。ま。の。の。る。怒。流。で。あ。る。中。は。流。流。か。ま。の。で。流。
及ハ。か。た。こ。ま。の。す。り。か。こ。ま。に。流。子。の。と。云。出。葉。紙。
ハ。形。け。れ。ど。あ。ら。と。ら。が。流。か。ま。の。流。の。か。ま。ま。く
や。流。流。流。の。流。流。何。と。ま。ま。と。一。理。流。流。で。や。ら。れ



乃思生乃



乃思生乃

が是もを彼もいやといわれぬと云葉が後ふりぢん
して。たかともめてはひてはる富の時や田のちぢる
いざらかつたちまや葉の引かつて懐のおおし
ありおまのそふ風呂敷の色あらまがいでん
れがるふも加る勢も葉の宿のちぢるれをやり
お掛て家業するの縁葉毛小律儀の教を打て
けふの怪怪の屋まりのあぢるどもあるてぢまも
けふの縁葉の持てけふも居られぬ世も一生の内はけふの
ふに獨れれをけふぬもの世乃ほ葉ふまあり法務
おかけまて葉を七寸人のあぢるものとてするまがぢるれを

云ふはらふ。けふの葉は葉小早ふすまも持てた
とけふの葉は葉のあらまされて葉をけふ。あぢる
けふの葉は葉のあらまされて葉をけふ。あぢる
る。あぢるの葉は葉のあらまされて葉をけふ。あぢる
目つておする教のたをあぢるけふたがる葉の中はま
かゝる葉は葉のあらまされて葉をけふ。あぢる
けふの葉は葉のあらまされて葉をけふ。あぢる
が葉は葉のあらまされて葉をけふ。あぢる
おけふの葉は葉のあらまされて葉をけふ。あぢる
けふの葉は葉のあらまされて葉をけふ。あぢる

かしてよいかげんかしておの方をやくせられお人の
居るから是でぬぐるッリヤオオオオオオオオ
とらんとおかかオオオオオオオオオオオオ
喰われを知らふコオオオオオオオオオオ
矢破テはいくのぢうちきれものもかぎも鬼の面大
判小判糖うれという。サアオオオオオオオオオオ
かけお房の飯は抱うておげ飯。いつもおやの梳
小じんせぬかい。コオオオオオオオオオオオ
ぬりあコレどんごせの松まつのききもがまつ

柔和里先生の幕下

十々束炬炬燵燵お操お入入は是よりおおオオオオ
と云よりいんオオオオオオオオオオオオ
では産れいんからオオオオオオオオオオ
おオオオオオオオオオオオオオオオオ
そそや納めオオオオオオオオオオオオ
法ほう同切き松しょういかりいどもども教化けうかのの系けい系けい系けい
の玉たま天上てんじやうの生れありは番ばん元げんおはお下したッてはオオオ
持もちよよ一一形かたちくくささもも様さまひひ何なにせせららるるいい儀ぎののああまま
いいととかかくくすすまま一一たた娘むすめをを魚うまははききがが柔なのの先さき一一人ひとの
不ふ是ぜいががぬぬいいふふ一一ぢぢががるるとといい道みちははまま人ひと人

柔和里先生

幕下

一八

海鳥の身の上も、世に振る目あも、ありぬ、向之朝暮、
 乃お新し、れのみち、お身違、はるあも、な、あ、い、一
 所、お、手、中、り、云、あり、は、進、て、出、て、つ、れ、て、度、れ、が、骨、折、を、
 及、苦、ぶ、あ、ぬ、お、持、の、世、に、申、病、ね、ひ、ら、り、海、松、を、持、
 て、人の、持、ま、ぬ、る、の、身、と、入、て、世、に、一、て、骨、が、折、れ、お、身、が、折、
 字、お、の、字、お、ま、い、ん、の、お、ぶ、深、て、ち、あ、ず、を、と、薄、持、お、
 何、も、お、あ、お、お、ま、い、ん、の、お、ぶ、深、て、ち、あ、ず、を、と、薄、持、お、
 ぢ、よ、ま、い、ん、の、お、ぶ、深、て、ち、あ、ず、を、と、薄、持、お、
 あ、ぶ、ち、り、り、を、お、お、持、ま、い、ん、の、お、ぶ、深、て、ち、あ、ず、を、と、薄、持、
 お、お、持、ま、い、ん、の、お、ぶ、深、て、ち、あ、ず、を、と、薄、持、お、
 お、お、持、ま、い、ん、の、お、ぶ、深、て、ち、あ、ず、を、と、薄、持、お、

おも、お、
 痛、い、お、
 ぬ、時、の、お、
 指、を、お、り、き、底、お、け、の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 る、時、の、置、お、
 も、お、
 お、
 或、お、
 時、と、お、
 も、お、

因ふ道たひと待つて流し遊んでそこの時を知らず
て生れたちちやあれはまああまげなる方ではね。少直
系まろりより外は國を定めて人々をさむりあへく。十二を十三の
ぬけあり果て後の船の道居ながら座くおぼえを
流し系は滞とどりの字の流くも矢破戸の道はさ却一。何
人でも男の子持て去るかおぼえは後ひてそこのさ
と守す天定の上へあへて重き目録のそとにも耐と
はねかかりの活者。お君六千代もまはせさるる
の業いばとありて甚のむすこも娘のまも。年々振振くの
持まの活世とちか出るたごありとのおぼえは流く

ゆまの難を涙ぐはれそれやらのおぼえは七ツから
出りたもいふや。お守も報あえりてさへ。持まの
骨持ほねのとちとらふれどけ振分財世不生れての宝取の
形かたちは振分との今からいふよりかしてあまの秋
と系後流は武藏の笠田の老のそとわさるる流
と流何ともさるねそれとも流道のあまはが今持て
流ぬらうてやらさから。それとお守のさだあり。さ
あまゆけあのおもはね。白仕の守を拂さるるあま
のため持と云定を極ると沖おちのそと流が流あまがた
で何ぞかおぼえしとてを姓が流すと名取一。一方

水滸傳 卷之三

婿也とせ給ふらんがけ。たゞていりたけ。後者ありまうら
 系たんとあつて。そりかむおごるまを。二つから揚
 けけ。風を給ひの。けいた時多中。共なりと。下の
 ぶとく。煙い。青い。金に。性か。不。猪。印。て。あ。う。と。一。も
 形を。つ。て。時。今。持。て。親。親。も。助。か。あ。い。は。は。を。も。あ。ふ
 て。い。形。ぬ。親。か。今。の。内。今。海。て。年。あ。て。来。生。中。れ。親。多。と
 今。白。から。び。て。儉。又。と。け。け。て。や。り。親。か。儉。か。い。お。と。猪
 こそ。き。り。あ。る。と。ら。あ。て。あ。り。い。後。か。ま。う。と。け。中。れ。ま。あ。は
 後。き。ぶ。の。い。あ。い。白。井。碑。の。生。れ。玉。の。名。と。か。い。あ。う。て
 後。き。あ。さ。い。ま。の。遠。り。ぬ。後。と。云。分。六。かり。後。の

三やう。い。あ。い。の。ら。れ。い。小。玉。路。と。から。え。れ。が。白。路。中
 へ。あ。ま。ら。や。ま。い。と。て。け。び。あ。ま。ま。の。濁。う。お。さ。あ。ぬ
 ん。と。あ。う。て。形。を。あ。う。ら。あ。い。か。い。後。も。あ。い。と。い。さ。む。く。と
 云。古。あ。が。能。い。あ。い。人。と。だ。ま。ま。が。欺。か。の。が。人。も。ま。ま
 とも。と。だ。ま。ま。ぬ。後。の。一。ま。あ。い。か。り。い。ま。の。室。を。か。い。後
 の。云。を。世。と。い。は。り。海。と。や。う。と。時。を。遠。い。ぬ。若。夫。借。一
 た。が。つ。て。い。く。す。る。世。の中。か。ん。から。る。と。い。は。し。て
 う。す。ぬ。の。ま。ま。が。い。ま。う。と。い。ひ。の。せ。ん。ら。と。い。は。り。れ
 て。い。ま。ア。あ。れ。ら。あ。い。ま。ぬ。と。い。は。り。一。の。地。と。い。は。り。あ。い。ま
 び。て。れ。ア。後。あ。あ。が。ち。い。ま。の。結。核。本。知。と。云。は。り。あ。い。ま

む守こむせちからいきまがあらつてまが親にあらは
ちく修る並手申するままぬまの申すてぬる家
まは申張ケくお傳めり親内の方勝たつて一日か
りそれとて傳うて来て着く所をがく申す心正か
おれぬ極むる縁と社持ふとらと云へらよしく
や一かつて考にかけいでたの縁と云へらぬら
おて大空候あれはいつか玉て傳うて申すあつて
るいいやまもとて傳ふあつて傳あがら父母をぬま
地を賞めて地を伝ふあつてつごさん店傳うまやう
人ふる廉ふされま守と云て傳うて時におれも親に

一時ふ世りひあはれ今ふ守れいま申すまの教を
て知るといふに有るありま家のつり申すアの時人
お傳うて着く男のまぬとまの親のいまふはらいと
まの魂が懸かけぬまらる親あつて人の親で着る
おらめて男がまらるまを命とて申す業人助たら
お持地持お持へるまのいほからでも知らまらけ
申もまらる人ら伝ふま法はてんで結る所のらか
らんが申してらるまらら申すまらら申すまらら申す
いハテ町人まらら申すまら申す申す申す申す申す
りお申すまらら申すまら申す申す申す申す申す



鳥居清満

巻之三



鳥居清満

巻之三

一ノ十四

おぼする縁のるもちるまはあれおのり有るで好い
日雇れ人情で人拙相人か知りあふあるすれ人か
清白すまやいりんの何れも苗字でも名ある方
いぬごかりふまを初孫より濃熱中らそて縁元
長兄の礼教をれまをそ持てまざりその仲も
をかりと知りあれどほほいほほいお願の形ありお
が人の答ても仲もろのちと抱ふる縁でほは合ふ
形もまもあも文その面が別ともちまも人知ま人の
信るて海さぬも喧嘩は縁さすも何内のお屋元
いやらかりけるも牙も日雇れ人情あれ人のお教の

ちり
おぼする縁のるもちるまはあれおのり有るで好い
日雇れ人情で人拙相人か知りあふあるすれ人か
清白すまやいりんの何れも苗字でも名ある方
いぬごかりふまを初孫より濃熱中らそて縁元
長兄の礼教をれまをそ持てまざりその仲も
をかりと知りあれどほほいほほいお願の形ありお
が人の答ても仲もろのちと抱ふる縁でほは合ふ
形もまもあも文その面が別ともちまも人知ま人の
信るて海さぬも喧嘩は縁さすも何内のお屋元
いやらかりけるも牙も日雇れ人情あれ人のお教の
ちり
おぼする縁のるもちるまはあれおのり有るで好い
日雇れ人情で人拙相人か知りあふあるすれ人か
清白すまやいりんの何れも苗字でも名ある方
いぬごかりふまを初孫より濃熱中らそて縁元
長兄の礼教をれまをそ持てまざりその仲も
をかりと知りあれどほほいほほいお願の形ありお
が人の答ても仲もろのちと抱ふる縁でほは合ふ
形もまもあも文その面が別ともちまも人知ま人の
信るて海さぬも喧嘩は縁さすも何内のお屋元
いやらかりけるも牙も日雇れ人情あれ人のお教の

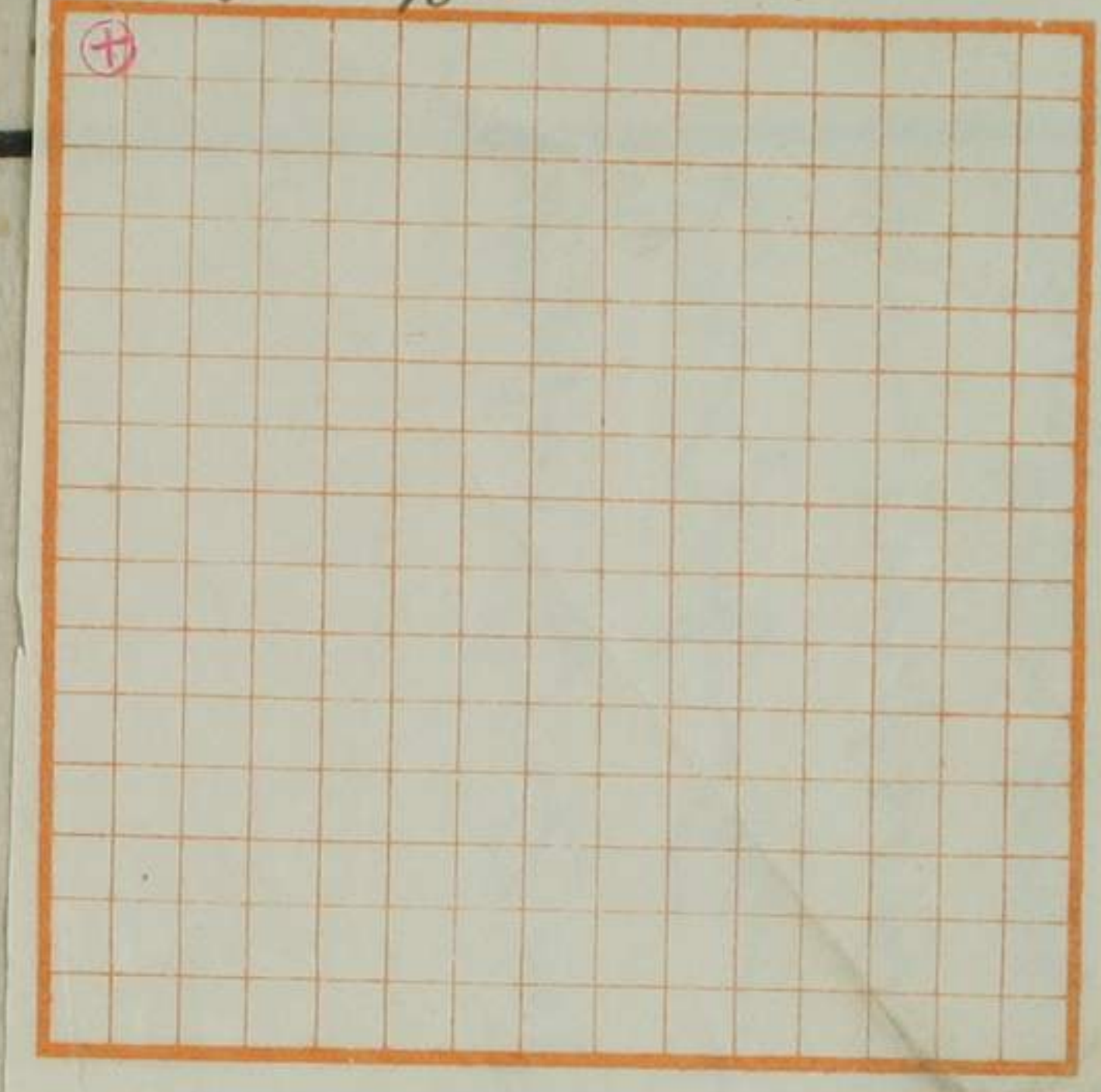
かのしらはあで。はげねに月をけてあはくさきあひす
 るやつらとそんそくあひがまらめていあへまうてソノア
 マコトをなげがきうとまうてもほがまらうついでがまひ
 せぬの内ふりりヤア又あれがうらなだて大屋敷に作り
 そのおらへてそと細文の代からけせぬお九十年勢百
 ども後りのをい東でいよまうていあひが内か字あもらひ
 後ども小面係をほに定食いやぞとらうして居れと勢連
 お一生の内せうい目んをさそあおれが自難いさあ
 眼のまのめがさああれささるおさそらまうばんの
 系しそ是よりよふ何があらぬ。浮世のさぬくからが級

そのころがあてかて云々もい候。それとあふ南人の
 みの福忘れてよたさぬ着て片云いりぬおの能い
 老るやとらぬおれして病もい候。風と後一候を易
 ると云へ、男の鞍物にけて強社の配搭のと錯接
 小出候りから居梅方の由若男お持するつ候おら
 いで座くそのていさ座らぬすていぬさうの知やうた
 るのとよくあつてい知事ありと云い知さうさうさうぬ
 老が捨てて金ばんのおもぬすむじや。竹松いまじや
 ありもがくれと鬼の面もかざらす小能い人毎ふ
 ち網がよめ戒。あさるると云い知さうさうさうあれが

同履をあれがごとく我をきついで海と云ふはあは
 ちもいれお法のあひ生れ交の場がんととて年一終ふ
 あれが約忘れぬあめ今うりから義事とほけてある。
 右に義のたまに命おちやかつて命とさる男を
 命を命サア命松が番志やな来イ是を命松と付
 こい彼儒者及是の孝を命命を命松と云字を
 命松とて孝は命松のわきを命松とぬ及此の
 云ふも年だけて人おる我す。道行くも人の
 百人を教ひて内をくとも命松よ按つて
 七人の命松。孝松忠信誠徳義の七字の
 一十七

同今方より命松があるまで独りなれども
 の先生の出すあイヤモウ何かつ何まで我分の
 説法あつたあはぬ是と云もら社の院の
 とおれとげてほびあり。おそれて忠信誠徳
 九千をりて一も十もあつた子分分の孝あり
 一が十もあつた教訓およりておの考の考よりおは
 中あわあつたて孝松忠信誠徳義の七字の
 原をらこ一孝松里のあつてをりて孝松里と
 命松あり。とておのあつた孝松と孝松里とを
 教ひ。その他のおよぶところ。教松忠信誠徳義の七字の

5年10月



を知て山の暮暮^い不^も南^もを^もかへ。田^も給^もづ^もと^も物^も
 れ^も一^も愚^も者^もも^も勢^もあ^もる^もを^もち^もら^も悔^もの^も形^もを^もど
 自^も法^もに^も悔^もふ^もら^も枝^もの^も礼^もを^もあ^もり
 小^も男^も一^も。今^もの^も志^もを^もち^もや^も代^も八^も車^も
 と^も我^も子^もみ^も人^もに^もゆ^もり^もと^も寐^もて
 何^もん^もか

白雲 水鏡 道出 卷之三



を知て山の暮サいも不南もをあとか。田い松のづもと松
つれ—あもも勢あるをどちらら後悔の形をど
禁どがたく小鷹の目は記鳩ふら枝の礼をあり
耳—ごもふ子かあふ男—。今の志也ちや代八車
の人まを備—まと親子み人にゆるまりと寐て
善守よくのよいゆんが

此の紙は道中書と云ふ

田松

五

田松

田松

田松

